

クラシック音楽入門講座

第4講 古典派の巨匠たち(1) ハイドン・モーツァルト

講師：佐藤卓史

2022年2月20日(日) 小手指公民館分館

「クラシック音楽」とは狭義では古典派の音楽のこと。
ハプスブルクの帝都ウィーンを舞台に、西洋音楽が「人類共通の遺産」へと昇華する
奇跡の50年間を、ふたりの巨匠の物語を通して俯瞰する。

1. 前古典派の作曲家たち

◎多感様式(感情表出様式):「率直で自然な」感情表現を重視、気紛れな作風

●カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ (1714-1788)

J.S.バッハの次男。ベルリンのフリードリヒ大王の宮廷を経てハンブルクの楽長へ。
クラヴィーア(鍵盤)の名手として知られ、理論書《クラヴィーア奏法》第1巻にある
「音楽家が自ら感動せずして、ひとを感動させることはできない」という格言は
多感様式を代表するモットーとされる。

●ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハ (1710-1784)

J.S.バッハの長男。父親の期待を背負ったが大成せず、ハレでの教会のポストを擲って放浪。
一貫性に欠けるが自由奔放で激しい感情表現から、多感様式の作曲家として再評価が進む。

◎ギャラント様式:流麗な旋律と単純な和声、明快素朴な作風

●ヨハン・クリスティアン・バッハ (1735-1782)

J.S.バッハの末子。ロンドンに渡り、オペラや「バッハ＝アーベル・コンサート」で大成功。
フォルテピアノを好み、優美な作風。モーツァルトに多大な影響を与えるが、46歳で急逝。

◎マンハイム楽派

ドイツ南西部マンハイムの選帝侯カール・テオドールの宮廷楽団で活躍した音楽家たち。
ヨーロッパ随一の精鋭部隊で、訓練された演奏技術を駆使して「マンハイム・クレシェンド」
(漸進的クレシェンド)、「マンハイムの花火」(急速に上行する音型)などの管弦楽語法を開発、
聴衆を驚嘆させた。また交響曲の統一規格を作るなど古典派の発展に寄与。

●ヨハン・シュターミツ (1717-1757)

ボヘミア出身。マンハイム宮廷に採用され1745年楽長就任。マンハイム楽派の創設者。

●クリスティアン・カンナビヒ (1731-1798)

J.シュターミツの後任楽長。マンハイム楽派の最盛期を支えた。モーツァルトとも親交。

●カール・シュターミツ (1745-1801)

J.シュターミツの長男。マンハイム楽派第2期の代表的存在。

2. 帝都ウィーン

ウィーンは西ヨーロッパ世界の最東端にある都市。13世紀からハプスブルク家の領地となる。
地理的条件から常にイスラム世界からの攻撃に晒されたが、1683年第2次ウィーン包囲を撃退後、
市域を急激に拡大し、諸侯が居宅を構えるようになった。

女帝マリア・テレジア(1717-1780)の治世下では芸術文化が奨励され、

ヨーロッパ中から音楽家たちが職を求めて集まる「音楽の都」が形成されていった。

3. ハイドンとモーツァルトの年譜

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン Franz Joseph Haydn

- 1732 3.31. ウィーン郊外ローラウで誕生
1738 ハイムブルクの叔父一家に引き取られる
1740 シュテファン大聖堂楽長ロイターのスカウトで
聖歌隊に入隊、ウィーンへ移住
1749 変声に伴い聖歌隊解雇、放浪と修行の日々を送る
1757 ルカヴィツェのモルツィン伯爵の宮廷楽長に就任
1760 マリア・アンナ・ケラーと結婚
1761 **アイゼンシュタットの貴族エステルハーツィ家の
宮廷副楽長に採用される**
1766 楽長に昇進。エステルハーザ完成、楽団強化。
1768-73頃 いわゆる「疾風怒濤(シュトゥルム・ウント・
ドラク)期」、短調が多く実験的な作風
1771 ♪クラヴィーア・ソナタ Hob.XVI:20 [譜例1]
1772 ♪交響曲第45番「告別」
1773 女帝マリアテレジア、エステルハーザ訪問
ハイドンの歌劇を絶賛し評判を呼ぶ
1780 ウィーンのアルタリア社から初の楽譜出版
(6つのクラヴィーア・ソナタ Op.30)
1781 ♪**ロシア四重奏曲(6曲)** ソナタ形式を確立
翌年アルタリア社から出版(Op.33)

1783 ロンドンから最初の招聘、応じず
1785 モーツァルトからハイドン四重奏曲を献呈される

1786 ♪交響曲第82-87番(パリセット)
1787 ナポリ国王の宮廷からの招聘に応じず

1789 ゲンツィンガー夫人との交流始まる
1790 エステルハーツィ侯ニコラウス死去、楽団解散
興行主ザロモンの招聘に応じ渡英を決意
1791 **第1回イギリス旅行**
3~6月に12回のザロモンコンサートに出演
♪**交響曲第93-98番(第1期ザロモンセット)**
第94番「驚愕」・第96番「奇蹟」
オックスフォード大学名誉博士号授与
1792 2~5月に12回のザロモンコンサート
6月末離英、帰途ボンでベートーヴェンに面会
1793 ゲンツィンガー夫人死去
♪アンダンテと変奏 Hob.XVII:6
1794 **第2回イギリス旅行**
2~5月に12回のザロモンコンサート
♪**交響曲第99-104番(第2期ザロモンセット)**
第100番「軍隊」・第101番「時計」・
第103番「太鼓連打」・第104番「ロンドン」
♪クラヴィーア・ソナタ Hob.XVI:50
(イギリスソナタ) [譜例3]…初のペダル指定
1795 9回のザロモンコンサート、帰国
エステルハーツィ家に再雇用、ウィーン定住
1797 ♪皇帝讃歌(「皇帝四重奏曲」主題、現ドイツ国歌)
1797-98 ♪**オラトリオ「天地創造」**
1799-1801 ♪オラトリオ「四季」
1803 最後の弦楽四重奏曲(未完)
以降衰弱が進み歩行困難、記憶障害
1809 5.31. ナポレオン占領下のウィーンにて死去(77歳)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart

- 1739 父レオポルト・モーツァルト(1719-1787)、
ザルツブルク大学を中退し音楽家の道を歩み始める
1743 レオポルト、ザルツブルク宮廷楽団に採用
1747 レオポルト結婚
1756 1.27. **ヴォルフガング誕生**
1761 最初の作曲
1762 最初の演奏旅行・ミュンヘン(選帝侯御前演奏)
第1回ウィーン旅行(皇帝夫妻御前演奏)
1763-66 「**西方大旅行**」:欧州の西半分を回る
ロンドンに約1年滞在、J.C.バッハと親交
1769-71 **第1回イタリア旅行**
ボローニャでマルティーニに師事、アカデミア会員合格
ローマで秘曲ミゼレレを記憶採譜、
教皇から「黄金の軍騎士勲章」を授与
1772 コロレド伯爵、ザルツブルク大司教に着任
1777-79 「**マンハイム=パリ旅行**」
1778 母パリで客死
1781 ウィーンでコロレド大司教と衝突、解雇
フリーランスの音楽家としての生活が始まる
1782 ♪**歌劇「後宮からの誘拐」**
コンスタンツェ・ヴェーバーと結婚
1784 「**予約演奏会**」を開始、多くの**ピアノ協奏曲**を披露
1785 レオポルトがウィーンを訪問
ハイドンを自宅に招き♪**ハイドン四重奏曲**を披露
1786 ♪**歌劇「フィガロの結婚」**
1787 父レオポルト死去
♪**歌劇「ドン・ジョヴァンニ」@プラハ**
1788 「プフェルク書簡」が書き始められる(困窮)
♪**交響曲第39-41番(後期三大交響曲)** [譜例4]
1790 ♪歌劇「**コシ・ファン・トゥッテ**」
1791 ♪歌劇「**皇帝ティートの慈悲**」 ♪**歌劇「魔笛」**
♪**レクイエム** 作曲開始するも完成せず
12.5. ウィーンで死去(35歳)
聖マルクス墓地に埋葬されるも所在不明に

1798 ニーメチェクによる最初の「モーツァルト伝」
1799 コンスタンツェ、自筆譜の大半をアンドレ社に売却

1809 コンスタンツェ、デンマークの外交官ニッセンと再婚

[譜例1] ハイドン:クラヴィーア・ソナタ ハ短調 Hob.XVI:20~第1楽章(1771)

Moderato

下降する2度=「ため息」のモチーフ

装飾音の多用

[譜例2] モーツァルト:クラヴィーア・ソナタ ハ長調 K545~第1楽章(1788)

Allegro 単純明快な旋律線

左手の伴奏パターン「アルベルディ・バス」
ギャラント様式の特徴

[譜例3] ハイドン:クラヴィーア・ソナタ ハ長調 Hob.XVI:50~第1楽章より(1794-95)

作曲家による初のペダルの指示(波線...)
pp open Pedal

[譜例4] モーツァルト:交響曲 第40番 ト短調 K550~第1楽章(1788)(フンメルによるピアノ独奏版)
モチーフの反復の多さ、効果について考えてみよう。

Allegro molto. $\text{♩} = 108$

2拍のモチーフのゼクエンツ(反復進行)

「A(1)」 「A(2)」 「A(3)」 「A'(1)」 「A'(2)」 「A'(3)」

「4小節間のゼクエンツ」

↑ドッペルドミナントの
減七の和音(強烈)

4. ハイドンの功績と特徴

●「整備者」:器楽曲形式を整備

・**曲種:交響曲、弦楽四重奏曲** バロック時代の「教会ソナタ」(緩急の交替)と「舞曲」の要素を継承

第1楽章:ソナタ形式(中庸~快速)

第2楽章:「緩徐楽章」(緩)・第1楽章と異なる調性

第3楽章:「メヌエット」(中庸)または「スケルツォ」(急速)・三部形式

第4楽章:「フィナーレ」・ロンド形式またはソナタ形式(快速)

・**楽式:ソナタ形式** 単純な二部形式・三部形式を発展させたストーリー性のある楽曲構造

提示部(主調(第1主題)→属調(第2主題))→**展開部**(転調、劇的な展開)→**再現部**(両主題とも主調)

●ユニークでユーモラスな音楽

・**独学**で作曲を習得、**創意工夫**を凝らす

・世間から隔絶された創作環境で、他の作曲家との交流が少なかった

●後世への多大な影響

・**モーツァルト**との友情:対照的な人生・性格でありながら、深い親交を結んだ数少ない作曲家仲間

・**ベートーヴェン**の師匠:第1回イギリス旅行からの帰途にボンで出会い激励、ウィーンで師弟関係に

●後半生に国際的名声を獲得

1780年代にはエステルハーツィ家のための作品が減少し、外国からの依頼が急増

ニコラウス侯の死後、自由の身となり2度にわたり渡英

5. 古典派の他の作曲家たち

●**アントニオ・サリエリ** (1750-1825):イタリアオペラの大家、ウィーン宮廷楽長

●**ムツィオ・クレメンティ** (1752-1832):ピアノの名手、イギリスで実業家として大成功

●**レオポルト・コジェルフ** (1747-1818):ピアノの名手、ウィーン帝室音楽教師、楽譜出版社

6. モーツァルトの功績と特徴

●「統合者」:各国の語法、器楽・声楽の様式を統合

・**幼少期の演奏旅行**で各国の様式を吸収し精通

・「声」の扱いの巧みさ(オペラ、歌曲)

・自身が**ピアノの名人**(ピアノ協奏曲)

●情感・精神性の豊かさ(緩徐楽章)

●精緻で考え抜かれた楽曲構成

ハイドンが「整備」し、モーツァルトが「統合」した古典派の音楽語法。

このあと、二人の流れを汲む**ベートーヴェン**が登場し「クラシック音楽」を完成に導く。

しかしベートーヴェンはそこにとどまらず、新たな道を歩み始める・・・